

みんなで築こう 素晴らしい竹田市 What a wonderful world!

土居昌弘の大分県議会議員活動報告

羽ばたき

ともに輝く
社会づくり



平成24年
新春号

編集：市民自治研究所「もやい」 発行：土居昌弘
土居昌弘連絡事務所 〒878-0005 竹田市挾田670番地
TEL 0974-62-4848 FAX 0974-63-0124
<http://www.doi-masahiro.jimusho.jp/>

「つながって生かされる」ともに輝く社会

昨年、私たちは、東日本大震災を経験しました。自然の脅威と、この社会の無力さ。そして被災された方々、一人ひとりの悲しみ。私たちは改めて、この世の無常を痛感しました。

無常とは、移り変わり、はかないことです。この世は、はかない。しかし、だからこそ、いとおしみ、大事にしなければならないと深く思っています。「はかない」から「捨ててしまえ」ではなく、つぶされないようにつながっていかうとしているのです。今、私たちは、「絆」の大切さを再認識しています。

さて、この「絆」をどのように結んでいくかが問題です。「絆」をつくらうとすれば、自分だけではできません。相手が必要。つまり、他人への関心や思い、さらにはそこに基づいた行為によってのみ、「絆」はできるのです。

昨年の10月22日(土)に竹田市経済活性化促進協議

会が「公開セミナー 寄り合い」を開催。そこでは大分大学の衣笠一茂教授が「調査によると竹田市民は共助の精神は持っているが、残念ながら竹田市には実践していくしくみが少ない」と指摘されていました。私たちはこの課題を克服し、支え、支えられる「顔の見える」社会関係を築いていかなければなりません。

「絆」は語源に「綱」を持ちます。綱を太くしようと思えば多くを束ねるように、人々が様々なかたちで、機会多く「寄り添う」ことが大事です。市民が寄り添いながら、他人のために手を出し合い、そのことによって一人ひとりが生の充実感を確かめられる社会へとなっていき、私たちの絆がさらに太くなっていきますことを心底から願っています。その実現に向けて一所懸命精進致します。

土居昌弘

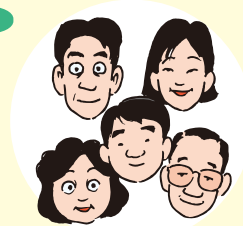
お知らせ

●大分県を語ろう、竹田市を考えよう!

座談会「もやい」

大分行政や竹田市民の暮らしの課題を解決に向けて語り合しましょう。
どなたでもお気軽にお越しください。

- 開催：平成24年2月24日(金) 午後6時から7時頃まで
- 場所：竹田市公民館竹田分館



※座談会「もやい」はどちらでも開催します。みなさまのお集まりにぜひ呼んでください。



●大分県議会 平成23年 第4回定例会

土居昌弘一般質問

12月6日(火)、大分県議会平成23年第4回定例会の一般質問に「芸術文化短期大学と看護科学大学のあり方」「看護師確保対策」「発達障がい児の学校教育」「農業教育」「葉たばこ生産」「鳥獣被害対策」「林業の課題」を持って登壇しました。

はじめに、玉来ダムの建設が継続になったことを知事以下執行部と議会、そして傍聴席の方々と喜びを分かち合いました。竹田市民の命、流域の暮らしを守るために今後も力を合わせて頑張ります。

では、土居昌弘の一般質問の一部を紹介します。

新卒看護師の確保を

(土居質問)

今年度大分県では622名の方々が看護師として就職しています。しかし、うち44%の276名が県外に就職。逆に県外の学校を卒業して、大分県で看護師として就職した方は62名。看護師不足が深刻化するなか、この対策は。

(福祉保健部長答弁)

修学資金の貸与に加え、養成所に県内就職希望者向け相談会の実施を要請している。また、新卒者は自身が実習した施設に就職する傾向があるので、実習の段階から県内の病院の魅力を感じてもらえるよう、実習指導者の講習会を開催するなどして受け皿となる医療機関の人材育成にも努める。



農業を学んだ生徒の進路開拓

(土居質問)

県立高校の農業、林業科の平成22年度の卒業生405名の進路状況は、農業就業者が4名でわずか1%。農業関連分野への就職は83名で20.5%。農業大学校への進学者は22名で5.4%。合わせても27.4%しか農業関連へは進んでいない。対策は。

(教育長答弁)

農業大学校や先進農家等での体験研修や青年農業者との交流等を実施することで、農業学科で学んだことを活かした進路選択ができるように指導している。

また、インターンシップやキャリアサポーターを活用しながら、農業法人等の企業訪問にも取り組み、新規開拓を進めている。

葉たばこの転作支援を

(土居質問)

本県の葉たばこ作付け面積は平成22年度で599ha。販売額20億5,500万円で県の基幹作物だ。ところが日本たばこ産業は廃作農家を募集。苦渋の決断の末、葉たばこ農家、県内262戸のうち約6割が廃作する。葉たばこ農家への支援策は。

(知事答弁)

10月末時点で廃作農家の約90%、135戸が農業を続ける意向を示している。転作品目は産地化が進んでいる「かんしょ(特に甘太くん)」「ピーマン」「白ねぎ」「里いも」等。これらの生産が円



滑に開始され、経営が安定するように積極的に支援していく。

山を守って豊かな社会に

(土居質問)

来年度の森林経営計画制度導入により、切捨て間伐や路網整備などの事業が大変使いづらくなる。また伐期を過ぎたクヌギ林の姿は目に余る。これらの対策は。

(農林水産部長)

間伐支援は、一定量の間伐材の搬出が要件となる。

切捨て間伐も搬出間伐と組み合わせ、搬出量を確保することで助成が受けられるように進めていく。

路網も集約化された施業団地に集中的に配置し、高性能林業機械の活用と併せて、間伐材の生産効率を高め、素材生産量の増大を図りたい。



また、大径化したクヌギの利用、活用も検討していく。

(土居要望)

国は「林業再生プラン」を掲げて林業振興に取り組んでいるが、木材生産の前にある「森づくり」の意識が薄く、製材加工後の「国産材需要」の喚起も不十分。木材を鉄や石油と同じマテリアルの一つとして捉え、質より量の林業を考えている。

この考えにない最も大事な部分、川上から川下に至る、森づくりからまちづくりをつなぎ、この大分県が林業を通じてより豊かになる施策を県が独自に実施して、補完してもらいたい。



井上伸史副議長と二人で説明

竹田中学校 で 議員出前講座



生徒の声

- 最初は「難しそうだな」と思ったけど、聞いていたらとてもおもしろかった。
- 「もっと県議会について知りたい」と、今までの自分では考えられないことを思うようになった。
- 5年後には有権者として責任を持って投票したい。
- 実際に傍聴して議会の様子を見てみたい。
- 税金の使われ方を知ることができた。

10月6日、竹田中学校3年生59名に「議員出前講座」を開催。議会の役割や県の予算などを説明しました。

「国の議院内閣制」と「地方の二元代表制」の違いを説明したうえで、大分県という地方自治に基づいた地域社会をともに築いていこうと訴えました。

人々が暮らす社会という家をつくるのが行政。その家のつくり具合を見て、不具合があれば注文をつけるのが議会。そして天井が落ちそうだと不満を言いながら暮らすのが県民…ではありません。

県民・行政・議会がいっしょになって社会を築いていくことが大事です。そのしくみづくりに邁進します!



トマトで元気に! 荻駅前を



買い物をする人々の笑顔を求めて、大分県街なかにぎわいプラン推進事業が行われています。この事業は商店街を活性化させる斬新なプランを公募し、優秀なプランを顕彰して、その実施を県が支援するもの。

昨年度、竹田商工会議所は「廣瀬武夫を核とした商店街活性化プラン」で応募し、見事第一次審査を通過したものの、最終の公開審査で残念ながら落選。会場となった全日空オアシスタワーで辛酸をなめました。

今年こそは、と書いていたら、お見事!九州アルプス商工会(女性部荻支部:衛藤アヤ子会長)の「トマトを活用した商店街活性化事業」が最優秀賞に!!(優秀賞はNPOベップ・プロジェクト)

皆さんは、JR豊後荻駅構内にトマト料理専門店「高原ステーション荻」を開店。ここではトマトうどんやトマトソースのカレー、トマトのパウンドケーキなど、荻のトマトや地元食材をとってもおいしく堪能できます。

また、これに合わせて荻町地域振興運営実行委員会(甲斐大蔵委員長)が駅前「荻めっけもん市」を毎月第2土曜日に開催。朝どりトマトをはじめ、豊かな農産物はもちろん、上浦商工会や昨年最優秀賞を獲得した佐賀関のコミュニティ食堂などの協力により、潮風香る海の幸も豊富に。

トマトの力で駅前の桜町商店街が変わっていきます。乞う、ご期待。



市は11月から開催されています。

人がいて、牛がいて、草原がある

四季折々に姿を変える、美しい草原、久住高原。実は、この草原は自然に保たれているのではありません。私たちが誇る野草地を守っているのは、人々の手による「野焼き」なのです。

9月23日の秋分の日、久住の稲葉牧場(佐藤幸生組合長)の「輪地切り」に参加しました。多くの

組合員と一緒に、大分県小規模集落応援隊として大分市の企業4社から15名、県職員も10数名、もちろん一般ボランティアの方々も県下



人の手による「輪地切り」



牧野組合の基地で作業説明



黒毛和牛を育む久住高原

各地(福岡県からも)から駆けつけて下さり、この作業の大切さを心から実感。総勢100名前後の人々が、4地区(稲葉、南稲葉、荻の迫、後山)に分かれて作業をしました。

輪地切りとは、春の野焼きの際に予定地の周辺へ延焼しないように、事前に防火帯をつくるための草刈りのこと。こうして昔から毎年欠かさず草を刈り、野焼きをして、汗を流しながら管理しているのです。

佐藤隆幸^{ほくや}牧野組合長は言います。「組合組織の高齢化と組合員の減少で、とても骨を折る作業となっているのが現状」だと。だからこそ「ボランティアに感謝し、この思いをかたちにしていきたい」と語気を強めます。組合では組合員の発案により、平成7年からボランティアを受け入れています。

ずっと残ってきた久住高原は、ずっと守ってきた人々の歴史です。これはもう組合員だけの財産ではありません。私たちの財産でもあります。力を合わせて守り続けていきましょう。



野焼きによって守られる草原